

日韓古代の比較年代資料の測定（第1報）

渡 辺 誠

名古屋大学文学部史学科

〒464 名古屋市千種区不老町

1. 目的

日本と韓国の緊密な交流は、従来の見解では日本へ稲作の伝播した弥生時代以降とみなされていた。しかし近年の筆者等の研究では、もっと古く縄文時代前期までさかのぼることが判明しつつある〔1〕。韓国の南海岸と西北九州とは、多島海海域という環境条件を共有して連続的であり、そこで外洋型の漁業が活発に行われ漁民の交流が盛んであったことが、その実体である。具体的には相互にまたがる漁具の分布によって知ることができるのであるが、しかし相互の所属時期の年代比定は十分ではない。これは編年の基礎となる相互の土器の共伴関係に恵まれた遺跡が少ないことに、主な原因がある。

また縄文時代の漁民の交流の上に稲作等々の新来の文化が伝播するのであるが、その実年代も中国との関係をも含めて重要である。これによっては稲作の伝播や弥生時代理解の背景に、大きな変化を生じる可能性が含まれている。

以上のような観点から、朝鮮海峡を挟んだ地域のC14年代の測定および整備を行うことは、研究の基礎的作業として不可欠なことであると考えられる。今回はその作業の第1報として、これまでの測定値とその資料的背景に限定して、報告を行うこととする。

2. 測定資料

これまで名古屋大学年代測定資料研究センターにおいて測定された韓国関係資料は1987年の靑島貝塚資料に始まり、1990年の松島貝塚資料まで7遺跡19件である。それらの測定結果は第1表に示すとおりであり、それらの遺跡の分布は第1図に示すとおりである。

それらの内訳は、新石器時代遺跡3遺跡6件、青銅器時代遺跡2遺跡2件、そして原三国時代遺跡2遺跡11件である。このうち原三国時代遺跡の2遺跡はいずれも貝塚であり、筆者も発掘調査に参加する機会を得て、資料は自身で採取したものも含まれている。

またこれらに関連する韓国の編年表は、第1表に示すとおりである〔2〕。日本との関係は右欄外に付記したとおりである。

次に各測定資料について、その背景を時代別に検討する。

3. 新石器時代の資料

3-1) 松島貝塚

もっとも古い年代が測定されているのは、全羅南道麗川郡突山邑松島に位置する松島貝塚の資料である。この遺跡は1989年に国立光州博物館によって発掘された貝塚を

伴う集落遺跡であり、第3層より住居址が1基発掘されている〔3〕。

測定資料は、この住居址の炉付近より検出された木片1点と、第4層より検出された木片1点であり、測定値とBC換算値は次のとおりである。両者の数値はきわめて近い。

No.1 (炉址付近)	5440±170BP (NUTA-1334)	3490±170BC
No.2 (第4層)	5430±170BP (NUTA-1335)	3480±170BC

この年代は新石器時代の前期に相当する。

3-2) 山登貝塚

これに次ぐのは、慶尚南道統営郡欲知面上老大島に位置する山登貝塚の資料である。この遺跡は1988年に釜山水産大学博物館によって発掘された貝塚を伴う集落遺跡である〔4〕。

測定資料は、第Ⅱ地区の柱状サンプル(第2図)より、最下層の若干貝を混じえる茶色粘土質土層(Ⅵ層)中のイガイと、第3層下部において検出された埋葬された少年骨の肋骨であり、それらの測定値とBC換算値は次のとおりである。

No.1 (イガイ)	4660±130BP (NUTA-678)	2710±130BC
No.2 (イガイ)	4360±110BP (NUTA-679)	2410±110BC
No.3 (ヒト肋骨)	3170±100BP (NUTA-975)	1220±100BC

この年代は、前2者は新石器時代中期後半、後者は同前半に相当する。各層出土の土器とも矛盾はない。

3-3) 鳳溪里遺跡

本遺跡は、慶尚南道陝川郡鳳山面鳳溪里に位置する新石器～青銅器時代の集落、および原三国時代の伽耶古墳群などの複合遺跡である。東亜大学校博物館によって前者は86年に、後者は1987～88年に発掘された〔5〕。

そのうち新石器時代の鳳溪里Ⅲ期に属する第9号住居址からは、ドングリ類の実(子葉)とオニグルミの殻(核)が検出された。朝鮮半島の新石器～青銅器時代遺跡においては、ドングリ類は7番目、オニグルミは初めての出土である〔6〕。測定資料としては、後者の一部を使用した。その測定値とBC換算値は次のとおりである。

4060±150BP (NUTA-1034)	2110±150BC
------------------------	------------

この年代は、新石器時代中期後半に相当する。鳳溪里Ⅲ期の土器とも矛盾はない。

4. 青銅器時代の資料

4-1) 松菊里遺跡

本遺跡は、忠清南道扶余郡草村面松菊里に位置する著名な青銅器時代の集落遺跡である。長期にわたって国立中央博物館によって発掘されているが、測定資料は1985年に発掘された54-5号住居址の炭化材である〔7〕。この住居址は焼失家屋であり、垂木等の配置がよくわかる好資料であるが、その一部を測定した(第3図)。その測定値と換算値は次のとおりである。

2500±90BP (NUTA-917)	550±90BC
----------------------	----------

この年代は、青銅器時代前期に相当する。

なおこの炭化材は、名古屋大学農学部の木方洋二教授によって、次のように報告されている〔8〕。

『コナラ属、コナラ亜属、コナラ節の材であると判定した。これにはコナラ・カシワ・ナラガシワ・モンゴリナラ・ミズナラがある』。

4-2) 大谷里遺跡

本遺跡は、全羅南道和順郡道谷面大谷里に位置する青銅器時代の遺跡で、国立中央博物館によって発掘されているがまだ報告されていない。測定資料はくり抜きの木棺の棺材で、その測定値とBC換算値は次のとおりである。

2200±90BP (NUTA-916) 250±90BC

この年代は、青銅器時代後期に相当する。

なおこの炭化材は、名古屋大学農学部の木方洋二教授によって、ノグルミ (*Platyarya strobilacea*) と報告されている〔9〕。

ノグルミはサワグルミと異なり暖地性で、かつ香木であり棺材にふさわしい。日本の古墳時代前期の割竹形木棺もヒノキとコウヤマキという香りのよい材を使用しているので、ノグルミの韓国内での普遍性を知りたいと思ったが、青銅器時代のくり抜き木棺自体が例が少なく、材質も異なっていた。国立中央博物館の李健茂考古部長の御教示によれば、慶尚南道義昌郡東面茶古里古墳 (BC 1 世紀) の 2 例のみで、材質は次のとおりである。

第 1 号墳 クヌギ (*Quercus acutissima*)

第 2 号墳 ハンノキ (*Alunus japonica*)

5. 原三国時代の資料

5-1) 郡谷里貝塚

本遺跡は国立光州博物館および木浦大学校博物館によって発掘された、貝塚を伴う集落遺跡である。特に木浦大学校博物館は1986～88年にかけて3次の発掘調査を実施し、報告書も刊行されている〔10〕。

測定資料は、各貝層より検出された貝類7点であり、測定値とBC換算値は次のとおりである。2度にわけて測定されているので、A・Bとに大別する。

No. A1 (ハイガイ, II 期) 2200±90BP (NUTA-744) 250±90BC

No. A2 (アカニシ, III 期) 1930±90BP (NUTA-745) 20±90BC

No. A3 (マガキ, IV 期) 2060±100BP (NUTA-746) 110±100BC

No. B1 (ハイガイ, V 期) 2700±110BP (NUTA-971) 750±110BC

No. B2 (ハイガイ, V 期) 2240±80BP (NUTA-972) 290±80BC

No. B3 (ハイガイ, IV 期) 2260±110BP (NUTA-973) 310±110BC

No. B4 (ハイガイ, IV 期) 2210±110BP (NUTA-974) 250±110BC

これらの測定値を文化期別に整理し、崔盛洛副教授の文化遺物に基づく年代観と対比すると、次のとおりである。

II 期 250±90BC BC 2 世紀後半～1 世紀前半

III 期 20±90AD AD 1 世紀後半

Ⅳ期	310±110BC	AD2世紀初頭～前半
”	250±110BC	”
”	110±100BC	”
Ⅴ期	750±100BC	AD3世紀前半
”	290±80BC	”

Ⅱ・Ⅲ期においても年代の開きが大きい、Ⅳ・Ⅴ期になると測定値自体も逆転しており、問題が大きい。測定自体に疑問点がない限りは、層序の攪乱または再堆積を想定しなければならないであろう。

5-2) 勸島貝塚

本遺跡は1985～86年に2次にわたって釜山大学校博物館によって発掘された、貝塚を伴う集落遺跡である。測定資料は、住居地区のⅠA区と墓地および貝塚のⅠC区において採取されたが、住居地区以外はまだ報告書は刊行されていない[11]。

資料はいずれも貝類であり、No.1は第2号住居址の覆土中の貝層、No.2～4はⅠC区の貝層からの採取資料である。

No.1 (マガキ)	2290±90BP (NUTA-352)	340±90BC
No.2 (マガキ)	2180±100BP (NUTA-353)	230±100BC
No.3 (マガキ)	2110±130BP (NUTA-354)	160±130BC
No.4 (マガキ)	2170±110BP (NUTA-355)	220±110BC

これらの測定値を鄭澄元教授の文化遺物に基づく年代観と対比すると、次のとおりである。

第2号住居址出土の土器群は典型的な勸島Ⅰ式土器であり、そのなかには城ノ越式などの北部九州の弥生中期の土器も含まれていて、BC2世紀中葉～1世紀前半と考えられており、測定値はやや古すぎる感がある。

また勸島式土器は郡谷里貝塚のⅢ期にも共通しており、それらの年代は今後さらに検討を重ねる必要がある。

6. 今後の課題

上に記したような結果を踏まえ、今後の課題として次の3点が指摘される。

1. 測定資料の堆積プロセスの検討。
2. 土器編年との不整合についての検討。
3. 日韓ともに測定資料の増加。

また建築材や棺材などのように、それらの文化史的な意義についても検討を加えることが重要である。

謝 辞

最後に、本研究を進めるに当って種々御教授を頂いた先生方の御芳名を銘記し、衷心より深謝の意を表する次第である（敬称略）。

〔韓国〕

韓炳三・李健茂（国立中央博物館）、池健吉・趙現鐘（国立光州博物館）、裴鐘茂

・崔盛洛（木浦大学校）、鄭澄元・安在皓（釜山大学校）、金東鎬・沈奉謹（東亜大学校）、朴九秉（釜山水産大学）、金建洙（名古屋大学研究生）。

〔日本〕

中井信之・中村俊夫（名古屋大学年代測定資料研究センター）、木方洋二（名古屋大学農学部）。

参考文献目録

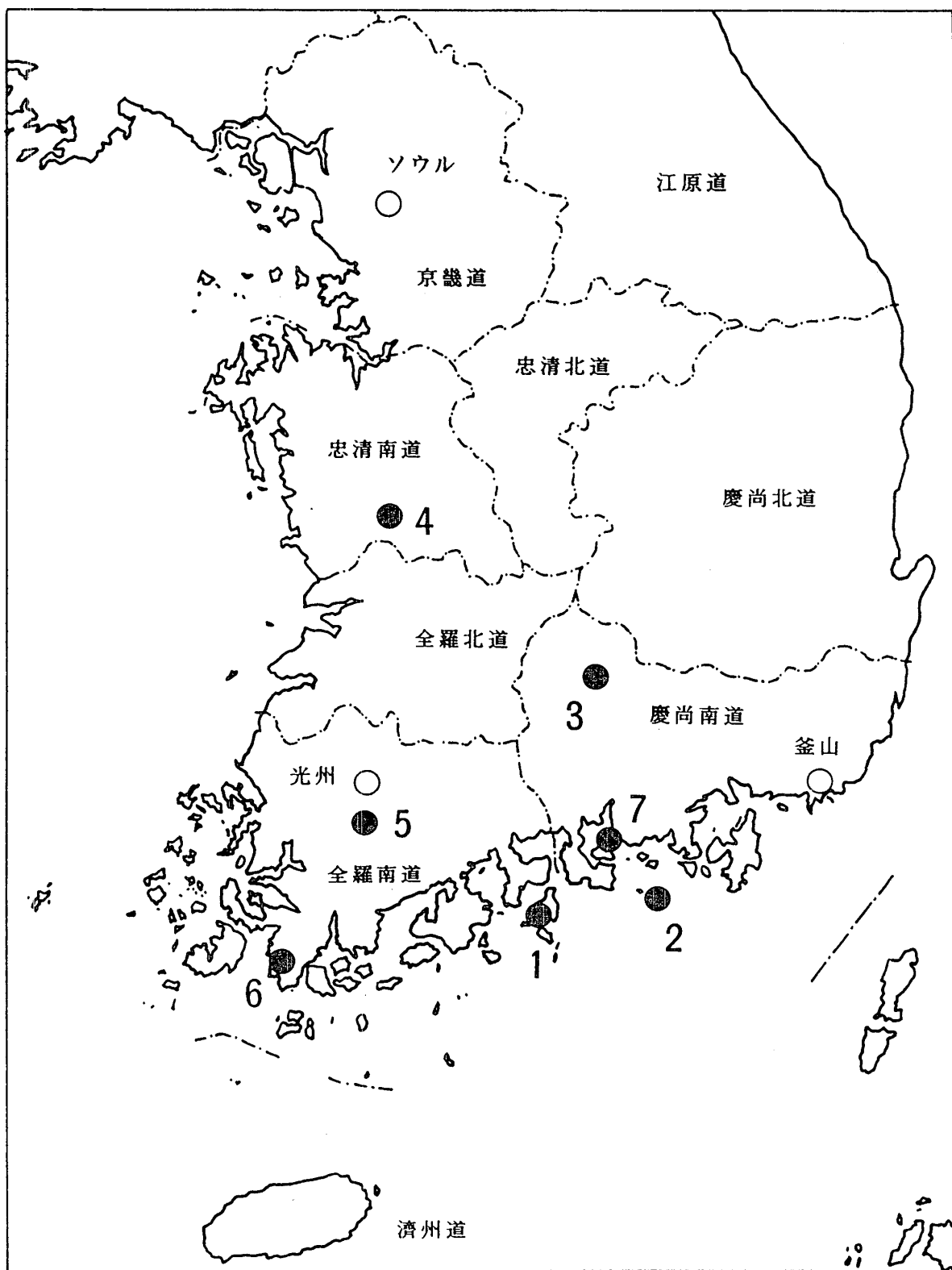
- [1] 渡辺誠，西北九州の縄文時代漁撈文化．列島の文化史，2（1985）．45～96pp.
- [2] 金元龍（西谷正訳），韓国考古学概説・増補改訂（1984）．六興出版．
- [3] 趙現鐘，突山松島・Ⅰ．国立光州博物館学術調査，19（1989）．
- [4] 金東鎬，山登貝塚．釜山水産大学博物館遺跡調査報告，1（1989）．
- [5] 沈奉謹，陝川鳳溪里遺跡．東亜大学校古跡調査報告書，15（1989）．
- [6] 渡辺誠（金宰賢訳），鳳溪里遺跡出土の植物遺体．考古歴史学誌，5・6（1984）475～489pp.
- [7] 池健吉他，松菊里・Ⅱ．国立博物館古跡調査報告．18（1986）．
- [8] 木方洋二，松菊里遺跡木炭材について．国立博物館古跡調査報告，21（1989）．130p.
- [9] 木方洋二，大谷里遺跡の材について．国立博物館古跡調査報告，21（1989）．129p.
- [10] 崔盛洛，海南郡谷里貝塚・Ⅰ～Ⅲ．木浦大学博物館学術叢書，8・11・15（1987～89）．
- [11] 鄭澄元他，勸島住居址．釜山大学校博物館遺跡調査報告，13（1989）．

第1表 年代測定値一覽表

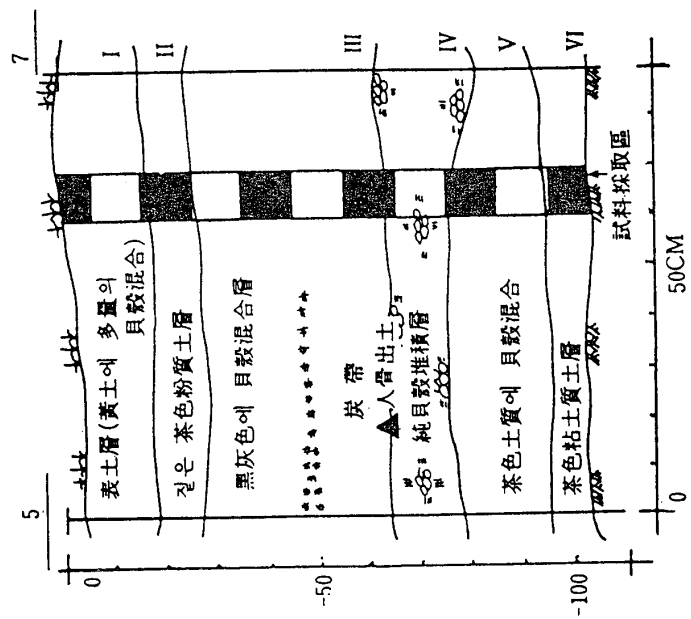
測定年度	遺跡名	時代	資料	測定値(B.P.)	NUTA番号
1987年Ⅲ期	慶尚南道勒島貝塚	原三国時代	貝類	2290±90	352
"	"	"	"	2180±100	353
"	"	"	"	2110±130	354
"	"	"	"	2170±110	355
1988年Ⅱ期	慶尚南道山登貝塚	新石器時代	貝類	4660±130	678
"	"	"	"	4360±110	679
1988年Ⅲ期	全羅南道郡谷里貝塚	原三国時代	貝類	2200±90	744
"	"	"	"	1930±90	745
"	"	"	"	2060±90	746
1989年Ⅱ期	全羅南道大谷里遺跡	青銅器時代	木片	2200±90	916
"	忠清南道松菊里遺跡	青銅器時代	炭化材	2500±90	917
"	全羅南道郡谷里貝塚	原三国時代	貝類	2700±110	971
"	"	"	"	2240±80	972
"	"	"	"	2260±110	973
"	"	"	"	2210±110	974
"	慶尚南道山登貝塚	新石器時代	人骨	3170±100	975
1989年Ⅲ期	慶尚南道鳳溪里遺跡	新石器時代	クルミ	4060±150	1034
1990年Ⅱ期	全羅南道松島貝塚	新石器時代	木片	5440±170	1334
"	"	"	"	5430±170	1335

	時代	日本	
	旧石器時代	旧石器時代	
CA			
8000	中石器時代	草創期	
		縄文時代	
5000	早期		早期
4000	前期		前期
3000	中期		中期
2000	後期		後期
1000	早期	晚期	
700	前期		
300	後期(鉄器I)	前期	
B.C.		弥生時代	
0			中期
A.D.		後期	
	(原三国時代 初期鉄器時代)		
300	三国時代	古墳時代	

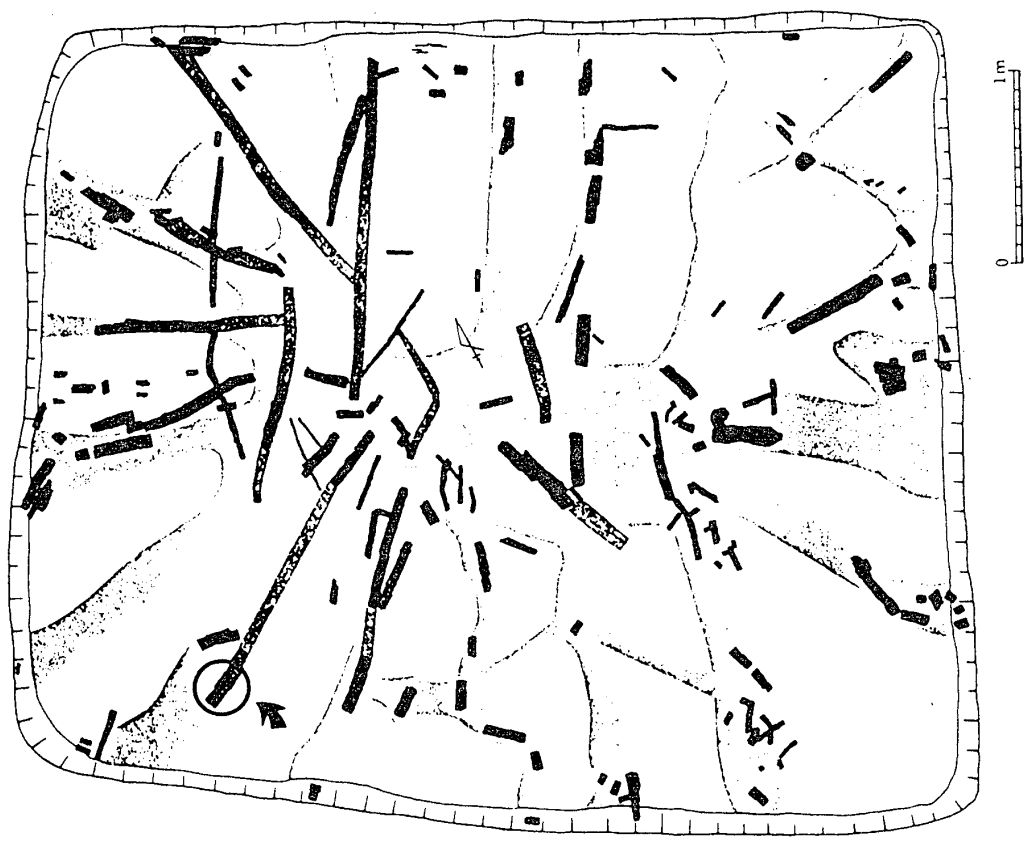
第2表 日韓古代の編年表



第1図 測定資料採取遺跡分布図（1：松島，2：山登，3：鳳溪里，
4：松菊里，5：大谷里，6：郡谷里，7：勒島）



第2図 山登貝塚資料採取地区断面図(報告書より)



第3図 松菊里第54-5号住居址における資料採取箇所(○印)

Comparison between ^{14}C Ages of Prehistoric Materials
from Japan and Korea

Makoto Watanabe*¹⁾

*Department of Archeology, School of Letters, Nagoya University,
Chikusa, Nagoya 464-01, Japan.